

## —色とサイズを変化させた場合—

○泉 加代子 西村 知栄 (京都府大)

目的 インターネットの目覚ましい普及は衣服の購買形態に変化をもたらすと思われる。自分が欲しい衣服を画面で選択し、身体寸法や体型を入力すると、自分が着装した映像が画面に現れ、それを見て購入を決定する時代がくると考えられる。衣服は人体にまとわれ、人間の動作に追随するものであるので、静止状態での情報だけでなく、動作時の情報も求められる。そこで、近年開発された歩行時の着装形状をシミュレートしたソフト VFD<sup>1)</sup>を用いて、静止時の前面シルエットと 3D 空間内での歩行時の動的シルエットのイメージを色彩とサイズを変化させて評価し、両者の評価に違いがあるかどうかを検討する。

方法 JIS 規格 S サイズと L サイズのモデルに同じデザインのワンピースドレスを着装させ、それぞれ 4 色 (赤[5R5/14]・青[3PB3.5/11.5]・黄[5Y8.0/13.0]・白[N9.5]) の静止画と動画を作成し、計 16 種類の刺激を作成した。イメージ評価は 16 対の形容詞を選定し、SD 法により 7 段階尺度で評定を求めた。判定者は男女学生計 50 名である。

結果 刺激ごとに各イメージ項目に対する判定者の評定を得点化して平均値を算出し、イメージプロフィールを作成した。色・サイズ別に静的シルエットと動的シルエットに対する各イメージ項目の評定平均値の差を T 検定した結果、両シルエット間のイメージに有意な差が認められた項目は、8 組合せを平均すると危険率 1% で全項目の 25%、危険率 5% で全項目の 42% であった。また、色にかかわらず、S サイズモデルでは動的シルエットの方が、L サイズモデルでは静的シルエットの方が「やせた」と評価される傾向が見られた。

1) デジタルファッションメディア研究会；バーチャル・ファッション・デザインへの招待、